金澤　正剛　KANAZAWA, Masakata

57 年人文科学科卒（1 期）

最初に私が ICU の存在を知ったのは、偶然予備校で私の隣に大和田康之君のいとこが座っていたことから始まる。休み時間に彼が、「僕のいとこが武蔵野の原っぱの何もない処に出来る大学に行くことになった」と言うので、面白そうだと思って実際に現場を訪ねてみた。するとなるほど、何もない原っぱの真ん中に現在の本館が建っているだけだった。ともかく入学試験を受けてみると、それが実に型破りの試験だった。こんな面白い試験をする学校なら、ぜひ入ってみようと、入ってみて初めて基督教の学校であることに気がついた。

入学した当初、私は将来何をしたいかなどということは考えていなかった。ところがアドヴァイザーが古典学の神田先生と決まって、初めて挨拶に伺った時に、私の一生を決定づけるようなことを言ってしまった。先生の部屋に入るなり開口一番先生が、「やあ君が金澤君か、良く来たね。ここで一体何を学びたいのかね」と聞かれたので、とっさに「音楽です」言ってしまった。それが何故だったか、今もって分かっていない。すると先生はごく当たり前のように、「ほう、音楽ね。それでは誰か良い音楽の先生を見つけて来なくてはならないね」と言われた。そしてその言葉通り、秋学期にはイェール大学出身の新進気鋭のバークハート先生が着任されることになった。この先生は長年マンハッタン音楽院で教鞭を執られ、今では引退されてデンヴァーに住んでおられるが、今もって親しく文通を続けている。

ICU を卒業した後はアメリカに留学したいと考えた私に、バークハート先生は当然のことながらイェールに行けと勧めて下さった。ところが私の 2 番目のアドヴァイザーであったムンスタバーグ先生は自分の出身校であるハーヴァードに行けと言う。中に入ったキダー先生が、両方応募して両方に受かったら、条件の良い方に行けば良いと言われ、結局奨学金をたっぷり出してくれたハーヴァードに行くことになった。

それ以後も人生の岐路に立つことが何度かあったものの、その度に結局は進むべき道が決まっていたような気がする。例えば博士号を取得した後、帰国すべきか、アメリカに留まるべきかと迷った時。また洗礼をいつ受けるべきか、受けるとするとカトリックかプロテスタントか。仕事を与えられて、それを受けるべきか、断るべきか、などなど。そのような時、私の家が禅宗でもあったことから、最初は瞑想思案の末に答えを見つけていたが、いつの間にかそれが祈ることへと変わってしまっていた。祈りによって、自然と道は開ける。今もなお就寝前に祈ることは、私にとって一番大切な日課となっている。

今年 1 月 6 日に私は 85 歳となった。幸い元気に過ごしているし、いろいろと仕事も入って来る。それは私にはいまだやるべき仕事が残されているのだということだろう。人生を振り返ってみると、進むべき道を自分から積極的に進んできたという気がしない。むしろ初めから進むべき道が決まっていたのではないかと思う今日この頃である。

横田　洋三　YOKOTA, Yozo

64 年社会科学科卒（8 期）

母校の ICU 同窓会から DAY 賞をいただくという栄誉に浴し、心より感謝申し上げます。

私の人生は、ICU とは切っても切れない深い関係にありました。1960 年から 64 年までの 4 年間は学生として、また、69 年から 95 年までの 26 年間は教員として、ICU には大変お世話になりました。その後東京大学、中央大学と所属が変わりましたが、それぞれの大学に院生や教員として活躍している ICU 卒業生が少なからずいて、その人たちとの緊密な関係を通して、ICU は常に身近な存在でした。また、私は専門が国際法でしたので、世界銀行や国連、ILO などの国際機構で実務に従事する機会に恵まれました。そうした国際的場面においては、かつての ICU のゼミ生や私の講義の受講生を含む多くの ICU 卒業生と接する機会を得て、ICU は小さな大学であるにもかかわらず、国際的には大きな存在であることを実感しました。

私の専門分野の業績としては、世界銀行などの国際金融機関の会社的性格に着目して「国際公社」論を展開したり、国際法と国内法の関係に関する「新二元論」を提唱してきました。さらに、今年 70 周年を迎えた世界人権宣言の法的性格について、新しい考え方を公表しました。従来の国際法の考え方は、世界人権宣言は条約ではなく単なる国連総会決議であるので法的拘束力はないというものでした。しかし、世界人権宣言が、採択後多くの人権条約において権威ある文書として前文等で援用され、また、世界の多くの国の憲法の人権規定に多大の影響を与えてきた事実などにかんがみて、世界人権宣言は、国家実行（プラクティス）と法的信念を伴った慣習国際法として結晶化しているという考え方をとるようになりました。そして、日本では人権問題はおもに憲法の人権規定を基礎に論じられますが、日本国憲法の人権規定には適用領域（日本の領域のみ）、享受主体（日本国民が中心）、遵守主体（公権力のみ）、人権項目（迫害から逃れる権利は憲法にはない）などについて制約があるので、日本において人権を語る場合には、そのような制約のない世界人権宣言を憲法の人権規定とともに基礎にすべきであるという新しい見解を発表してきました。そうした発想を得た背景には、ICU における「ユニークさ（独創性）を尊び」、「既存の学問領域にとらわれない自由な発想を重んじる」教養教育（リベラルアーツ・エデュケーション）があったと強く思っています。

これまで私が一国際法学徒として無事に歩んでくることができたのは ICU のお蔭であることを、この機会にあらためて感謝をもって噛みしめています。

長井 鞠子 NAGAI, Mariko
67 年 Inter-divisional. 卒業 (11 期 旧姓: 奥津鞠子)

ICU での四年間を振り返り先ず心に浮かぶのは「まるでおもちゃ箱をひっくり返したみたいな四年間」です。四年間、高揚感を味わうこともありつつ、身を切られるように辛い紛争の連続、心を焦がす恋の経験、不真面目な私ではありましたが、うわっ！面白い、という授業の数々、今でも私が大切にしている音楽(室内楽研究会 CMS)活動のあれこれ、そして何よりも今の私のキャリアの方向性を決めるにあたって最大の決定要因だった ICU 在学中の 64 年東京オリンピック大会……。

今、歳をとってみれば、四年なんてあっという間ですが、その短い四年間に、あれやこれや がギュッと詰め込まれ、私に見せてくれた ICU での四年間。

仙台市のミッションスクールに通っていて、高 3 の時に、AFS 交換留学制度でアメリカはテキサス州ダラス市の高校で一年間過ごし帰国した、アメリカンファッション大好きな女子高生は、進学にあたり、子供の頃から「ベニスの商人」のポーシャに憧れていた事もあり、国立大の法学部に行きたい気持ちも少しはありながら、アメリカ的なるもの惹かれ、JF ケネディ大統領の下、明るく、世界をリードする国、そしてアメリカ留学である程度身についた英語になんらかの形で関わりたいかも、という感覚で ICU に入りたいと思ったのでした。

こんな漠然とした憧れで入学した ICU は、結果として、その後の 50 年以上の私の人生に大きく影響しました。

まずは何と言っても 64 年のオリンピックです。入学してすぐに、オリンピックでの学生通訳募集の掲示があり、学内選抜に運良く通りました。当時は都内の大学に組織委員会が役割を割り振り、ICU は馬術と水泳競技の担当でした。人類最大の祭典に参加する興奮。通訳業務は大したことなく、オリンピックの現場に自分がいることが嬉しく誇らしく、通訳って何と簡単な仕事だろうと愚かにも思ってしまい、あとが大変でしたが、オリンピックが通訳という世界に私を誘ってくれたのは間違いないことです。通訳の世界は対象が森羅万象。あれも面白いけどこれも深いものがあるよ、と見せてくれた ICU のお陰で、次から次へと対象が変わる仕事にもついていけたと思っています。また、オリンピックにはその後も関わり、長野冬季大会、2016 年の招致、そして来年の東京大会招致決定の場面に立ちあえたのも嬉しいことでした。

次は複眼的思考です。ICU は今でこそ流行りの、ですが当時は、「ん？なに勉強する大

学？」という教養学部のみの大学です。世の中には今、どんな問題があるのか、それに対してどんな研究や活動がなされているのか、を次から次へと見せてくれる大学。遊ぶことや騒ぐことは好きでも、基本的にぼぉーっと何も考えていなかった私に、大学紛争やベトナム戦争が激しくなる世の中で、見えていることの裏には何がありうるのか、批判的に物を見ることの大切さを示してくれた大学生活でした。

卒業以降、就職もせず、通訳者としての仕事以外をやった事が無い私が、今回 DAY 賞に選ばれる、と聞いたときには、紛争のさなかの卒業で、大学当局への抗議の意味もあり、夏に執り行われた卒業式も出なかった私には縁がないもの、と思っていただけに、意外な喜びでした。推薦し、選考してくださった同窓会の方々に感謝します。

要人・著名人通訳歴

海外国家元首・閣僚、都知事、エジンバラ公フィリップ殿下、アナン国連事務総長、ダライ・ラマ 14 世、マイケル・サンデル、グラハム・ハンコック、マイケル・クライトン、ホーキング博士、アンソニー・ホプキンス、ケビン・コスナー、デビッド・ベッカム、ヨーヨー・マ、イル・ディーヴォ、ウラディーミル・アシュケナージ　他多数。

■著書

『伝える極意』（2014 年 2 月　集英社新書）

『情熱（パッション）とノイズが人を動かす』（2015 年 12 月　朝日新聞出版）

■テレビ出演

・テレビ朝日情報番組『サンデーLIVE!!』内『TOKYO 応援宣言』
「松岡修造の 2020 みんなできる宣言」（2018 年 9 月）

・NHK BS プレミアム ドキュメンタリードラマ『江戸城無血開城』（2017 年 1 月）

・NHK ドキュメンタリー番組『プロフェッショナル仕事の流儀』（2014 年 3 月）

・TBS 職業情報バラエティ番組『ジョブチューン』（2013 年 10 月）

・テレビ朝日　情報番組『モーニングバード！』（2012 年 11 月）　他

■趣味のビオラはセミプロ級（丸の内交響楽団）

2019 年 3 月 30 日

安藤　公秀　ANDO, Kimihide

82 年語学科卒（26 期）

ICU 同窓会でのご挨拶

皆様こんにちは。先ずは書面でのご挨拶という失礼の段、深くお詫び申し上げます。

９年間に渡る三菱商事パキスタン総代表の任期を終え、３月末日にパキスタンを離任、日本に帰任することになっておりまして、まさに後任者への引継ぎラストスパートです。本来ならば馳せ参じなければならないのですが思うに任せず申し訳ありません。

今般は、2019 年 DAY 賞という過分な賞を頂戴することとなり感謝の気持ちで一杯です。ICU、ICU 同窓会員の皆様、DAY 選出委員の方々、そして私を推薦してくださった方々に厚く御礼申し上げます。

2018 年、そしてまだ９か月ほど残っていますが 2019 年、この二年間は小生にとって人生の節目の二年となりましょう。二回目のパキスタン、一回目は 1998 年から 2003 年までの五年間、そして今回は 2010 年から現在までの九年間、足掛け 14 年。本年 11 月に 60 歳還暦を迎え三菱商事を定年退職する予定です。会社人生における最後の二十年間の大半以上をパキスタンで過ごし、捧げ、三菱商事パキスタン総代表というだけの立場ではなく、在パキスタン海外企業商工会の会長を任じられたり、パンジャブ州の投資貿易振興庁非常勤理事や、カラチ最大の総合病院の非常勤理事も務めたりしてパキスタン・ビジネス界に課外活動でも貢献した、ということで、昨年 2018 年 3 月 23 日に、パキスタン大統領より、Sitara-E-Pakistan 「パキスタンの星」という外国籍民間人として最高勲等の勲章を授かりました。叙勲式には、苦楽を共にした、ICU 同窓生で一年半後輩な女房と一緒に出席しました。

そして、この DAY 受賞です。聞くところによると、26 期生の中では初受賞とのこと、勿体ない話です。いままでの人生に対して、一気に過分なご褒美を頂戴したこの二年です。

まだまだ引退する気などさらさらない小生でございます。「まぁ、此処まで、お前はソコソコやってきたな。」、「ちょっとご褒美あげるから、更に頑張りなさいよ。」と神様に肩を叩かれた気分で、これらを励みに益々と精進していくぞ、と気合満々でございます。

ICU 在学中の四年間は、小生にとって代えがたい四年間でした。懺悔しますが、講義の出席率は高い方ではありませんでした（これは少し悔やまれます）。第二男子寮で、テニス部で、アメリカンフットボール同好会でした。英語劇にも一回出演しました。とても度量の広い教授・講師陣の皆様、我々を大人扱いしてくれた学生部の方々、先輩、同期、後輩、海外からの留学生たち、広いキャンパス、バカ山、教会、学食、D 館、そして、日本に居る限り、この季節には必ず見に行く桜並木。全く根拠の無い自信と、そして生産性に若干欠ける好奇心旺盛な世間知らずの若者だった小生を皆が温かく育んでくれたからこその、今の小生です。いくら感謝しても感謝しきれません。日本に戻れば、そろそろ TAKE のみならず GIVE もしなければならないと考えています。なにか、些少ながらでも、同窓会に貢献できることはないかと考えていきたいと思っています。なにかございますでしょうか？本日はありがとうございました。

功能 聡子　KONO, Satoko
87 年自然科学科卒（31 期）

この度は、DAY 賞を頂きまして心より御礼申し上げます。同窓会、選考委員会、大学関係者の皆様にも感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、2009 年に ARUN（アルン）を設立しました。(ARUN は、カンボジア語で「夜明け」、1 日の始まりの希望とエネルギーを、起業家が新しい社会を作ろうとする希望やエネルギーに掛け合わせて名付けた)。ARUN のビジョンは、「地球のどこに生まれた人も、一人ひとりの才能を発揮できる社会」です。ARUN は、貧困、環境、教育、医療などの社会課題の解決に取り組むビジネス、起業家への投資をしています。私たちはこれを「社会的投資」と呼んでいます。お金儲けや財務的リターンだけを目指すのではなく、社会課題の解決という社会的リターンを追求しているからです。

私は両親がクリスチャンの家庭に生まれました。小さい頃から聖書や教会はとても身近な存在でした。中学生の時に、ネパールで医療活動をされていた岩村昇先生のお話しを聞いたことがきっかけで国際協力の仕事を志し、ICU に入学しました。ICU では、数学、のちに生物学を専攻し、ワンダーフォーゲル部、日本民族舞踏研究会、畑同好会に所属しました。今振り返ると、生涯の友、師、そして伴侶との出会いが凝縮された４年間、何と幸いな日々であったことでしょうか。しかし当時は、自分の生きる場所、進むべき道がわからず、悩みながら過ごしていたことを思い出します。

ICU を卒業して東京で就職、その後、栃木県のアジア学院、ニューヨークの Church World Service を経て 1995 年にカンボジアに赴任、カンボジアの復興、開発を支える仕事に 10 年間従事しました。楽しくやりがいのある仕事でしたが、農村開発や貧困削減を目指すプロジェクトの多くが援助が終わると活動も消滅してしまうのを見て、このままでいいのか、という思いが強くなりました。そして、カンボジア人起業家との出会いから、社会的投資を始めることになりました。

現在は、インドにも投資先を広げています。投資先の例をあげると、農村にテクノロジーを使って医療サービスを届ける事業や地下水の汚染を取り除く樹脂を開発し安全な飲料水を届ける事業、そして、インドの伝統的な酪農セクターを IoT を使って改革しようという事業があります。また、貧困層の女性と、家事労働者を必要としている人（インド国内で 2000 万人以上）のマッチングサービスの事業があります。これは、貧困層の 80%が住む農村で農業以外の現金収入を増やすのが狙いで、女性達に安全な職場環境を提供するために、雇用先が決まるまでの簡易宿泊所の提供や契約書の作成のサポート、24 時間ヘルプラインの設置など、様々な工夫をしています。女性達の給与は 30-50％アップ、収入の増加分は子どもの

教育費にあてるなど将来に投資するような循環を生むビジネスを後押ししています。

社会的投資の醍醐味は、社会問題の解決という困難な課題に、ビジネスで取り組もうとする志ある起業家と出会い、事業の成長とその事業を通して社会を良くして行く、それを投資で手助けできることです。とはいえ、日々いろいろなことが起こります。経営は山あり谷あり、手痛い経験もしました。きれいごとではすまされない本気の関わりの中から、投資というものの奥深さ、起業家の苦悩、お金の力、人間の持つ弱さと強さを知ります。

人間は弱いものではないでしょうか。でも、弱さの中にある強さを信じて共に歩むとき、隠された可能性が引き出される、と信じています。起業家が心動かされ、働きかけている名もないひとたち。彼らも貧しく、弱さを抱えた人たちかもしれません。しかし、彼らの中に隠されている可能性を信じて解き放つ手助けを、起業家たちはしているのだと思います。

最後に、ARUN の設立を応援してくれた夫、山岡鉄也のことを書きたいと思います。
彼は、1981 年 ICU 自然科学科入学、山が大好きなワンダーフォーゲル部の先輩でした。しかし、2010 年に肺がん（ステージ 4）と診断されて、彼が登る山は、「がんと共に生きる」「がんと共に働く」社会の実現となり、2017 年 7 月に亡くなるまで、「がんと就労」をテーマとしたプロジェクトに取り組みました。死後、サバイバーの方から、「山岡さんには、病気になって今まで通りに生きていけなくなった自分が、少しでもどなたかのお役に立てれば、と考えられるきっかけを与えて頂きました。心の中の、永遠の恩人、友人です。」という言葉を頂いた時、彼が生前言っていたキャンサーギフトという言葉を思い出しました。それは、病の中にあっても生きる、弱さの中にある強さ、だったのではないかと思います。聖書に、次の一節があります。

> *ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。（コリント人への第二の手紙 12 章 9 節）*

卒業後何年たっても、悩みながら弱さを感じながらの日々ですが、与えられたいのちを全うできるよう、これからも歩んでいきたいと思います。